

む脳全体によって感じられ、また脳全体によってそれに対する反応が作り出される。

順 応 内 科

甲状腺クリーゼ早期発見のための日常観察

発表者 石 井 啓 子
順 応 内 科 一 同

内分泌疾患の中でも甲状腺機能亢進症は比較的多い疾患で甲状腺疾患のうちでは約40%を占めています。圧倒的に女性に多い疾患であり、頸がはれるという美容上の問題からも、従来は治療の主流が、外科的切除にありましたが、ヨード剤にはじまり、抗甲状腺剤、放射性ヨードなどの内科的治療も一般化されている現在です。

そこで内科的にどのような点に注意し看護にあたらねばならないか、また発生率は低いが最も危険な甲状腺クリーゼの早期発見にはどうしたらよいか非常に大きな問題であります。甲状腺機能亢進症の一症例を中心に、それらについて考えてみたいと思います。

甲状腺機能亢進症と甲状腺クリーゼの病態生理

甲状腺機能亢進症とは甲状腺ホルモンの分泌過剰によっておこる疾病であり、病因については間脳下垂体系の異常説、自己免疫疾患説、遺伝説などありますが現在なお不明です。主な症状は(表I参照)眼球突出、甲状腺腫、頻脈、振戦、発汗、動悸、体重減少、精神不安等があります。一般に甲状腺機能亢進症というと、頸がはれる、眼球が突出すると考えられがちですが、このような典型的な症状を伴わない甲状腺機能亢進症もあり、そのような場合頻脈からほとんどの患者が心臓病と誤診され治療を受けていたり、又やせているために栄養失調として治療を受けている例もあります。甲状腺機能亢進症にもいろいろな病状がありますが、やせている人や、重症者にはある時期を境として急激に病状が悪化し、甲状腺クリーゼを生ずる場合があります。甲状腺クリーゼの発生率は非常に少ないが、いったんクリーゼをおこすと死に直面するほどの危険性をもっています。クリーゼの主な症状は a) 流れる如き発汗 b) 著しい頻脈 c) 38~40℃の高熱 d) 下痢(腹痛を伴わない) e) 精神不安があります。発生誘因は a) 肝障害 b) 感染、外傷、精神的肉体的ストレス c) 甲状腺からの過量のホルモン流出 d) 副腎髄質の異常のいずれかひとつ又は組合わせによっておこると考えられています。例えば甲状腺手術の術後、単なる抜歯皮膚切開、試験穿刺、感染などの肉体的ストレスが誘因となっている場合も十分あると考えられています。

表 I

甲状腺機能亢進症における臨床症状		— 547名	
1. 心悸亢進	100%	10 眼球突出	71%
2. 甲状腺腫	99%	11 脱力感	70%
3. 神経過敏	99%	12 下肢の浮腫	35%
4. 皮膚症状(きめが細かい、湿潤)	97%	13 頻回の排便	33%
5. 振 戦	97%	14 下 痢	23%
6. 発 汗	91%	15 心房細動	10%
7. 暑さに弱い	89%		
8. 疲労しやすい	88%		
9. 体重減少	85%		

患者紹介

○ 藤 ○ 子 女 性 35才 会社員

<病 名> 甲状腺機能亢進症

<入院期間> S47年5月24日~7月31日

<主 訴> 手指の振戦 発汗 動悸 甲状腺腫 眼球突出 頻脈 イライラ
不眠

<現 病 歴> S38年頃より甲状腺腫 振戦等に気づき信大第2外科を受診し、甲状腺機能亢進症と診断され、抗甲状腺剤を内服したが、2ヶ月間ほどで中断し、以後放置してしまった。S40年~41年にかけて再度亢進症状強くなるも放置状態だったが、本年5月ごろより動悸、振戦、発汗、甲状腺腫大、イライラ、不眠等のため近医受診し当科紹介され入院となる。

<入院中の経過>

典型的な甲状腺機能亢進症の症状を持った患者であり、特に発汗は強度であり、不眠、イライラを訴える程でしたが私達の分類からいうと表IIのように2度に属します。抗甲状腺剤の内服期間中に甲状腺機能亢進症は改善され、最初針穴に糸も通せなかったのが、通せるようになりました。入院後14日めの6月6日の夜(表III)突然37.9℃の発熱、多量の発汗、動悸、呼吸困難、頻脈不整脈がみられ、甲状腺クリーゼ、抗甲状腺剤による薬物中毒及び尿路、上気道感染などが考えられました。幸いにも最も危険であるクリーゼの発生は防止することができました。その後も抗甲状腺剤の内服を続けましたが、完全治癒までには2~3ヶ月以上かかること、また経済的理由などが

ら早期退院を希望し、放射性ヨードの内服により軽快し退院となりました。

表II

振 戦 の 分 類

0°	全くふるえず。
1°	腕をまっすぐに伸し、手指を広げた状態でふるえるのに気付く。
2°	茶碗・箸・新聞など物を持った時にふるえる。
3°	物をつかめない。足・舌がふるえる。

表IIIは別紙の如く。

クリーゼ早期発見の観察点

クリーゼの危険を思わせた時のO藤さんの症状、観察点

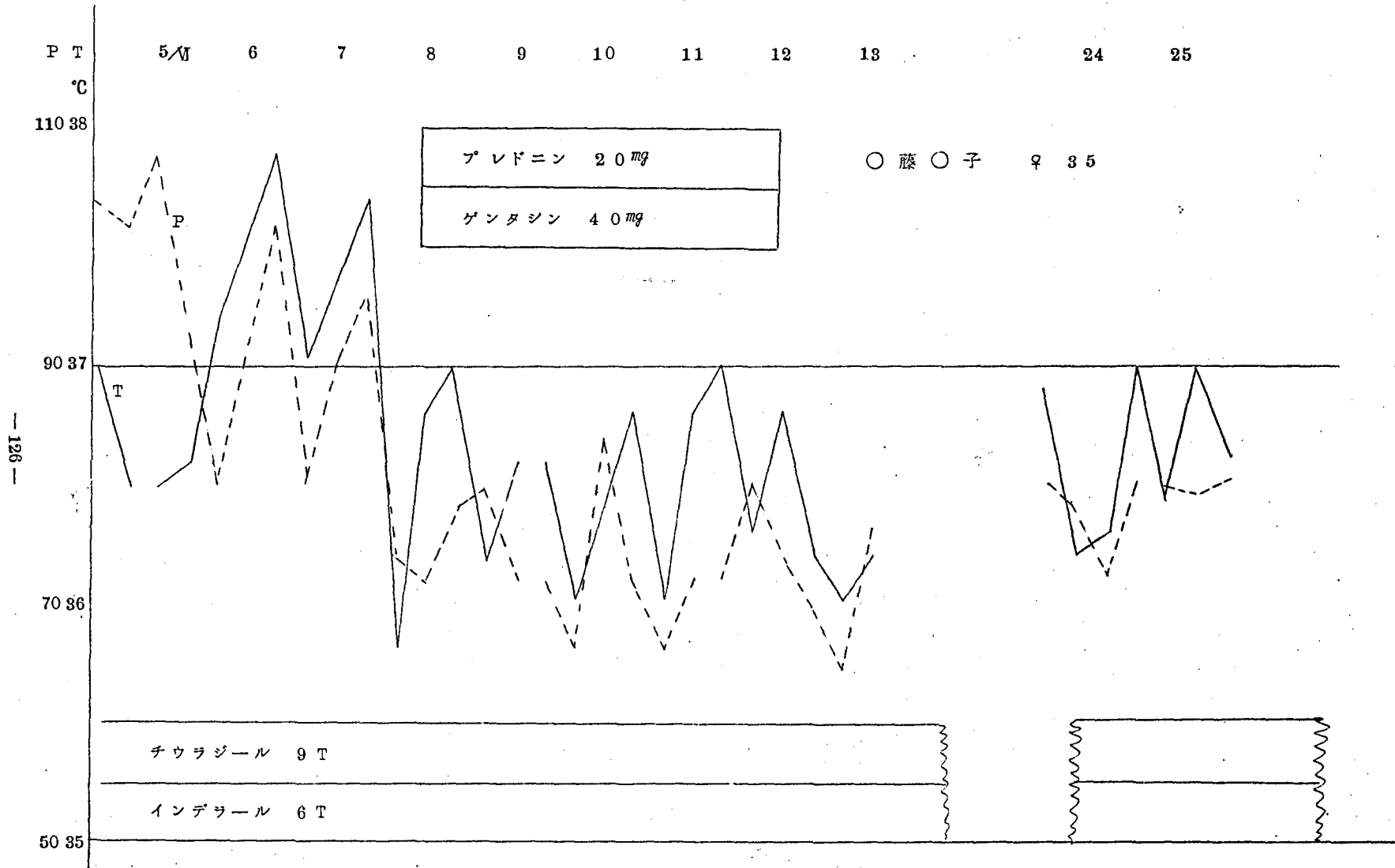
- 1) 異常発汗
- 2) 発熱
- 3) 頻脈(不整脈)および動悸

1) の異常発汗について

発汗の程度は人により主観的になりやすい傾向があるが、客観的に観察することが好ましいと思われる。したがって私達の経験から表IVのように発汗について分類し、できるだけ客観的に観察できるよう基準をもうけています。しかし、日常観察の中で発汗が強いから、すなわち病状が重いと必ずしもいえませんが、病状が軽快してくると、発汗の程度も軽くなってくるため、病状把握の上で大切な観察点になると思います。特にクリーゼを思わせる時には、この点に注意しなければなりません。この患者さんの場合、安静臥床においても汗が吹き出すように流れ、夜間の更衣も2~3回しなければならぬ状態で明らかに異常発汗と考えられました。

表IV 発汗の分類

1°	正常の状態
2°	皮膚がしっとりとして湿潤している。
3°	玉の汗が流れる程の発汗で盗汗もある。
※	観察時は自分の手の甲で患者の皮膚にさわってみる。



2) の発熱について

甲状腺機能亢進症では、一般に代謝が亢進しているため体温はやや高めであるが、平常の体温に比較して急激に発熱がおこった場合には、クリーゼおよび種々の感染症などを考えなければなりません。この患者の場合は入院時よりおよそ37℃前後の体温で微熱のみでしたが、6月6日の夜、特にはっきりした原因もなく37.9℃の発熱があり、これと同時に異常発汗、動悸、呼吸困難がみられ、クリーゼの発生が危ぶまれました。直ちに解熱のための処置がなされました。また翌日より抗生物質とステロイドの注射も行なわれ患者の状態はおちつきました。

3) 頻脈・不整脈・動悸について

甲状腺機能亢進症の患者の約100%に頻脈が現われ、80~120/分、多い時は150~200/分もあり、これは重症者ほど多く、甲状腺機能亢進症の患者を悩ます最も大きな症状です。脈拍数は精神感動などでもすぐ変動しやすいので環境を整え検脈しなくてはなりません。また重症者は心臓の過剰運動からうつ血性心不全をきたすこともあり日常何気なくする検脈も脈の性状に特に注意し耳を傾ける必要があります。やはりO藤さんも不整脈を伴う頻脈があり、6月6日は呼吸困難が現われるほどの動悸がありました。心電図では明らかな心房細動が認められましたが、6月7日から頻脈は軽減し、70~90/分におちつき、これは抗頻脈剤内服3日目であり効果が現われ始めた時期かと思われまます。

この患者についてクリーゼを発見する上で重要な観察点をあげましたが、クリーゼが発生すると、一刻を争うものであり、その死亡率は極めて高いということから、事前にクリーゼを防止する事が重要です。

この他に重要な観察として、便(下痢)、精神症状の観察があげられます。

下痢) この患者は、特に下痢はみられませんでした。甲状腺機能亢進症の患者は、陽ぜん動運動が亢進しているため1日2~3回の普通便の排便をみる場合があります。重症者は排便回数も多く、下痢便で、まれには1日30~40回のコレラ様下痢をきたすことがあります。これには普通腹痛を伴わず、下痢を軽視したり見すごしたりしないよう気をつけると同時に、食事との関係も考え合わせ、看護者側の適切な働きかけが大切になってきます。

精神症状

甲状腺クリーゼを甲状腺機能亢進症の極限とみなすならば、精神不安などの精神状態もクリーゼの重要症状とみることができます。O藤さんは姉から養女を迎え養育していたところ、離婚問題の生じた折にその養女を手離すということがあり、その後間もなく入院となったためもあり、入院当初は精神不安があり、話の途中、涙を流したり、イライラし落ちつかない時もありました。一般に甲状腺機能亢進症の患者は、精神活動も亢進状態にあり、イライラし落ち着きなく、集中力なく、

活動的、多弁、神経過敏、興奮しやすいなどの何らかの精神症状がみられます。特に精神症状だけが強く現われた場合は、神経科で入院治療を受けていたり、鎮静剤を内服していたような例もあります。このような強い精神症状をもつ患者、あるいはとりたてて精神症状のみられない人でも、急激に精神異常をきたし、傾眠、 睡に陥ることがあるので、その前にクレーゼの前兆として異常な精神症状を見極められるような観察力が看護者にとって必要となってきます。また家庭不和や強い精神的打撃などの因子による精神不安も患者の病状を悪化させるひとつであり、安定した精神状態へと導くことも回復への一助となります。

幸いにクレーゼは発生しませんでした。クレーゼ発生の誘因は現在なお不明であり、それに対する予防はもっぱら日常の観察が大切であり、看護婦の役割が大きいとも思いました。以上簡単に甲状腺クレーゼ早期発見のための日常観察点をのべましたが、まだ経験も浅く不十分な点もあり、これを機会に更に研究を深めたいと思います。